

Kの果断に富んだ性格は私によく知れていました。彼のこの事件についてのみ優柔なわけも私にはちやんとのみ込めていたのです。つまり私は一般を心得た上で、例外の場合をしつかり攫まえたつもりで得意だったのです。ところが「覚悟」という彼の言葉を、頭の中で何べんも咀嚼しているうちに、私の得意はだんだん色を失って、しまいにはぐらぐら動き始めるようになりました。私はこの場合もあるいは彼にとつて例外でないのかもしれないと思ひ出したのです。全ての疑惑、煩悶、懊惱、を一度に解決する最後の手段を、彼は胸の中に畳み込んでいるのではなからうかとうたぐり始めたのです。そうした新しい光で覚悟の二字を眺め返してみた私は、はつと驚きました。そのときの私がおもひの驚きをもって、もういつぺん彼の口にした覚悟の内容を公平に見回したらば、まだよかつたかもしれませぬ。私はただKがお嬢さんに対して進んでいくという意味にその言葉を解釈しました。果断に富んだ彼の性格が、恋の方面に發揮されるのがすなわち彼の覚悟だろうといちぢずに思ひ込んでしまったのです。

私は私にも最後の決断が必要だという声を心の耳で聞きました。私はすぐその声に応じて勇気を振り起こしました。私はKより先に、しかもKの知らない間に、事を運ばなくてはならないと覚悟を決めました。私は黙って機会を狙っていました。しかし二日たつても三日たつても、私はそれを捕まえることができません。私はKのいないとき、またお嬢さんの留守な折を待つて、奥さんに談判を開こうと考えたのです。しかし片方がいなければ、片方が邪魔をするといったふうの日ばかり続いて、どうしても「今だ。」と思う好都合が出てきてくれないのです。私はいらいらしました。

一週間の後私はとうとう堪え切れなくなつて仮病を使いました。奥さんからお嬢さんからも、K自身からも、起きろという催促を受けた私は、生返事をしただけで、十時頃まで布団をかぶつて寝ていました。私はKもお嬢さんもなくなくなつて、家の中がひっそり静まった頃を見計らつて寢床を出ました。私の顔を見た奥さんは、すぐどこが悪いかと尋ねました。食べ物や枕元へ運んでやるから、もつと寝ていたらよからうと忠告してくれました。体に異状のない私は、とても寝る気にはなれませぬ。顔を洗つていつものとおりに茶の間で飯を食いました。そのとき奥さんは長火鉢の向こう側から給仕をしてくれたのです。私は朝飯とも昼飯とも片づかない茶碗を手を持ったまま、どんなふうの問題を切り出したものだらうかと、そればかりに屈託していたから、外観からは実際気分がよくない病人らしく見えただらうと思ひます。

私は飯をしまつてたばこを吹かし出しました。私が立たないので奥さんも火鉢のそばを離れるわけにゆきませぬ。下女を呼んで膳を下げさせたらうえ、鉄瓶に水をさしたり、火鉢の縁を拭いたりして、私に調子を合わせています。私は奥さんに特別な用事でもあるのかと問いました。奥さんはいいえと答えましたが、今度は向こうでなぜですと聞き返してきました。私は実は少し話したいことがあるのだと言いました。奥さんは何ですかと言って、私の顔を見ました。奥さんの調子はまるで私の気分に入り込めないような軽いものでしたから、私は次に出すべき文句も少し洩りました。

私はしかたなしに言葉の上で、いいかげんにうろつき回つた末、Kが近頃何か言ひはしなかつたかと奥さんに聞いてみました。奥さんは思いもよらないというふうをして、「何を？」とまた反問してきました。そうして私の答える前に、「あなたには何かおっしゃつたんですか。」とかえつて向こうで聞くのです。